

日記を書く 年頃

作家 中沢 けい

言葉の中にしかないものがある。この頃、そういうことを少しずつ考える。まだ、まとまった考えというものがあるわけではない。例えば「永遠」という言葉。それから「魂」という言葉。そういう言葉は何か具体的なものを指し示しているのではなくて、言葉の中にだけ存在しているものではないかと、そういう感じがしてくるようになった。

「永遠」や「魂」に限らず抽象的な言葉は、言葉の世界にしか存在していないものを示している。「愛」「勇氣」「信頼」「知恵」と日常語として何気なく使っている言葉でも、それそのものにじかに触れた人はいない。そうした抽象語のイメージを示した絵画もあれば、音楽もあるけれども、それらは言葉が示すものの一部でしかない。

それで思い出すのが、日記をしきりに書いた年頃のことだ。

小学生の時は日記を書くのが苦痛だった。

きた。

日記を書くのが嫌になって、備忘のために毎日の出来事を書くだけになったのは三十代も半ば頃だ。自分の心を細密に覗き込むことに嫌気がさした。

詩を読むようになったのも、あの頃だった。つまり過剰なくらいに日記が書けるようになった十五、六歳の頃だ。言葉の中にしかないものに出会うというのは、つまり、そういうことだったのかと、今にして気付く。高校生が自分の心の秘密に寄り添いながら、詩を読み日記を書くのは、それほど珍しいことではない。たぶん、多くの人がそういう経験をしているはずで、そして、いつしか、そこから遠ざかったあとで、あれは未熟な行いだったと少し恥ずかしい気持ちで振り返ったりするのだろう。が、ほんとうに、単に未熟であるだけだったのだろうか？ 私にはそうは思えないのだ。

言葉の中にしか存在しないものに、出

た。そもそも日記を書くという以前に文字を書くだけでもたいへんな苦勞で、ことに小学校低学年の時の絵日記はおそろしいほどへたくそな文字が並んでいる。もちろん、抽象的な表現も乏しい。中学生になると、毎日「生活ノート」というものを書くことが義務付けられた。毎日、三行から五行ほどの文章を書いて担任に提出することになっていた。今の学校では「生活ノート」のようなものを使っているのかしら？と思いつくことがある。「生活ノート」には小学校の時の日記以上に苦勞した。なにしろ担任に提出するのだから心に浮かぶことをそのまま

会った驚きはあった。言葉の中にしか存在しないものに触れた戸惑いはあった。言葉の中にしか存在しないものを見詰めてしまった怖れはあった。驚き、戸惑い、怖れは未熟さの現れとして片付けてしまっても良いのかもしれない。が、言葉の中にしか存在しないもので、未熟さで括ってしまうわけにはいかないだろう。私がこんなことを考えるのは、あの過剰なくらいに日記が書けた時期に出会った詩を、もういちどじっくりと読み返してみたいという誘惑に近頃、しきりに誘われるからだ。

優れた詩人が優れた作品を残すのは、ランボーや中原中也を引き合いに出すま

は書けない。当たり障りのないことを書くこうとすると、わずかな記述が難行苦行になってしまう。この作業を、さして苦痛も感じずにさつさと片付けてしまう同級生がたいへんにうらやましかった。

日記をしきりに書いたのは、その後、つまり高校生になってからのことだ。義務でもなければ、提出する相手もいなかった。インターネットで自分の日記を不特定多数に向かって公開することなど、想像もつかなかった三十年以上も昔の話だ。中学校の「生活ノート」の頃に生まれた心の秘密は、この頃になると大きく広く、それは無限と言っても過言ではないくらいに広がっていた。心の秘密といたわけではない。人に話すには曖昧であやふやなものをたくさん抱え込んでいたのだった。言葉はつぎつぎに溢れてくる。だから、日記を書くことは苦痛ではなかった。過剰なくらいに書くことがで

でもなく、十代の後半から二十代にかけての時期であることが珍しくない。言葉の中にしか存在しないものに目が開いた驚きと戸惑いと怖れが、詩人に優れた作品を書かせる原動力になっている。平凡な俗人にとっては、膨大な言葉を連ねた日記を書くエネルギーが、天賦の才に恵まれた詩人にとっては、凝縮された詩を生むための原動力になっているばかりか、その命さえ削らせるほどの刃にもなる。時に、詩人は命を凝縮させ短命に終わることさえある。言葉の中にしか存在しないものに、言葉で触れるのは、そのような危険を孕んだ仕事である。だから、残された詩は、未熟な青年の心にか響かないものではない。「魂」とか「永遠」とか、確かにそれが「ある」と感じられるものについて、もう驚きも戸惑いも怖れも失った今になって、詩人たちの声に耳を傾けてみるのは、きつと楽しいことに違いない。



中沢 けい
なかざわ

1959年、神奈川県生まれ。作家、法政大学教授。1978年、『海を感じる時』（講談社）で群像新人賞受賞。『楽隊のうさぎ』（新潮社）『豊海と育海の物語』（集英社）など著書多数。近著に、10代の人たちに自分自身で考えるためのヒントを語りかける本『大人になるヒント』（メディアパル）がある。